

4 中部エジプト・アコリス遺跡およびニューメニア採石場遺跡について — 近年の調査から —

内田杉彦

明倫短期大学 歯科衛生士学科

keywords : 古代エジプト, 考古学, 歴史学

はじめに

エジプトの首都カイロの南約210kmに位置するアコリス遺跡の発掘調査は1981～1992年に(財)古代学協会, その後は筑波大学を中心に名古屋大学, 九州大学などのチームが加わった調査団(発掘隊長: 川西宏幸 筑波大学名誉教授)によって行われており, 発表者は1986年以降の調査に参加している¹⁾²⁾。

2002年度には, 同遺跡のランドマークである岩山の南側の地区(南地区)を対象とする調査が開始され, 2005年度からは同遺跡の南約15kmに位置するニューメニア採石場遺跡の調査も並行して実施されている。本発表では, 近年におけるこれら2つの地区の調査成果について, その一端を報告することとする。

調査成果の概要

アコリス遺跡南地区では, 新王国時代末期～末期王朝時代初期(前1200～700年頃)の居住地と墓域が確認された。居住地遺跡では, 住居址や穀物倉庫, パン焼き窯のほか, 皮革工房跡, 皮革製サンダル, 織物用の紡錘車など手工業生産に関する遺構や遺物が数多く出土している。紅海産のタカラガイの貝殻, フェニキア産のワインやオリーブ油の容器であるアンフォラの破片も大量に発見されており, 活発な交易が行われていたことがうかがえる。遺物としてはさらに住民の信仰の痕跡を示す多様な護符にくわえ, 当時の地域社会の一面を示す文献資料であるパピルス文書の断片も発見されている。この居住地は前1000年頃から徐々に放棄され, そのあとには棺に納められた遺体が埋葬された墓域が形成されていくが, 皮革工房の操業や人々の居住はなお数百年間にわたって続けられていたとみられる。

ニューメニア採石場遺跡には採石作業の痕跡が横穴や縦方向の溝として残され, そこに朱書きのグラ

フィティが多くみられる。これらのグラフィティはギリシア系の王朝であるプトレマイオス朝初期の約30年間(前254～222年頃)に, 当時のエジプト文字であるデモティック(民衆文字)と外来の言語であるギリシア語で記されたもので, 採石のため掘られた溝や横穴の寸法, 作業担当者の名, 作業に関わる日付などからなっている。グラフィティの人名にはエジプトだけでなくギリシアの人名も含まれており, ほぼ同じ内容をデモティックとギリシア語で併記したグラフィティもしばしばみられることから, エジプト人とギリシア人がともに採石作業に従事していた状況がみてとれる。しかしグラフィティの日付が新しくなるにつれデモティックはみられなくなり, ついにはギリシア語のみが記されるようになることから, 公的な記録言語としてのギリシア語の使用が急速に進展したことがうかがえる。

まとめ

アコリス遺跡南地区の居住地は, 一般にエジプトの王権・国力の衰退期とされる新王国末期及びその直後の時代に独自の経済活動を展開していた地方集落の一例であり, 中央権力の弱体化が必ずしも当時の地域社会の衰退にはつながらなかったことを裏付ける証左となっている。また, ニューメニア採石場のグラフィティは, ギリシア系王朝の支配下においてギリシア文化が地方にも急速に浸透していった当時のエジプト社会の文化変容の一端を示す貴重な資料と言えるだろう。

参考文献

- 1) The Paleological Association of Japan, INC. Egyptian Committee: *AKORIS-Report of the Excavations at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*, 1995
- 2) Kawanishi, H. et al. (eds.): *Preliminary Report AKORIS 1997-2015*, 1998-2016